

9. リベラル・スタディ：臨床を想定した医師国家試験問題のVR教材試作に関する報告

¹⁾ 医学部1年, ²⁾ 語学・人文教育, ³⁾ 情報基盤センター
渡邊祐大¹⁾, 井上 舜¹⁾, 石原拓実¹⁾, 坂本洋子²⁾,
坂田信裕³⁾

本研究は、医学部1年の授業科目「リベラル・スタディ」において、医師国家試験問題の内容を実際の現場に近づけて再現した様子を見ることができるVR (Virtual Reality) 動画教材を作成し、考察と今後について検討を行なったものである。これは、座学で様々な問題を解く医師国家試験の勉強において、現実の医療現場との間にギャップを感じている学生を対象にした取り組みとして位置付けた。

方法はセミナー室において、国家試験問題の内容に沿った内容を再現するスクリプトおよび機材と配役を用意し、全天球カメラ (GARMIN 社 VIRB360) を用いて、VR動画を撮影した。動画の内容は、国家試験の再現であるため、始めに問いの内容となる映像を流し、次に選択肢を示した後に解答となる行動を含んだVTRを流し、最後に正誤の選択肢を映像内に示すという流れで作成した。教材として選んだ問題は第113回医師国家試験問題113B33である。この問題は問題文に書かれている場面から、患者への適切な処置を選択する内容である。今回、この問題を選んだ理由は、映像により、緊迫した状況での判断を体験できると考えたためである。具体的には、RSウイルス感染症による呼吸障害のために入院している4ヶ月の乳児が、様態が急変したために行う処置は何かという問題であった。尚、現場状況を再現するため、BLSとALS資格を有する獨協医科大学医学部5年生大久保翔平氏の監修協力を得て、撮影内容の検討を行なった。

結果として、VR映像の特性を生かし、目標としていた臨場感やスピード感を映像によって再現することで、実際の現場に近い状況を体験できる教材を作成することができたと考える。

その一方、以下が課題として考えられた。1つは今回の教材作成がリベラル・スタディの授業のみで行われた為、時間的、技術的な面で制約があったこと。また、撮影時の演者が医学部1年生であった為、現場の再現内容が、医学的・医療的な視点から不十分であったことなどが考えられた。今後の展開としては、実際の病院等での撮影や、再現内容のより医学的・医療的な検証を行うことで、更に臨場感を増した教材とすることができると考える。さらに、様々なタイプの問題に応用させていくことも今後の発展として考えられる。

今回のVR映像教材作成を通じ、1年生が医師国家試験問題に触れ、考えることで、今後の医療知識の学習の仕方を考える機会となった。さらに、協力して頂いた先輩からの指導により基本的な医療行為を学ぶ機会を得たことで、より臨床に対する関心を深める機会となった。

10. 医学部生を対象とした生活習慣病予防の調理実習に関する検討

¹⁾ 医学部1年, ²⁾ 地域医療教育センター
根岸晃平¹⁾, 西山 緑²⁾, 橋本充代²⁾, 鈴木江里奈²⁾

【背景】地域包括医療実習Iは自由選択科目であるが、地域枠入学者には必須の科目であり、診療所実習を主たる実習としている。しかし、地域医療に公衆衛生的な予防医学が必要であることから、開講初年度より「良い食生活を考える会」として壬生町食生活改善推進員の主催する生活習慣病予防教室に参加して、調理実習を行っている。

【目的】本研究は、令和元年10月5日(土)に施行された「良い食生活を考える会」に関するアンケート調査により、医学部生が生活習慣病予防の調理実習を行うことの意義を検討することを目的とした。

【対象と方法】対象者は、地域包括医療実習I履修者で、10月5日(土)~21日(月)の期間に学習支援システムLMS上の匿名アンケートに回答した24名である。性別は、男子16名、女子8名だった。

【結果】食育の話について参考になったと回答した人は、24名中20名であった。朝食をほとんど欠食しないものは、半数以下の11名であった。野菜350gについて「よく分かった」「少し分かった」と回答したものは22名であった。野菜を「たくさん食べている」と答えた人は4名と少数であるが、本実習後に「今から食べようと思う」人が9名、「そのうち食べようと思う」と答えたものが7名だった。また、医学生がこのような調理実習を行うことは「意義がある」と答えたものが20名であり、「意義がない」と答えたのは4名だった。将来、医師になってから生活習慣病予防のための食生活について患者に話をしたいと回答した者は22名いた。また、若い人を対象とした生活習慣病予防教室は意義があると答えたものが20名いた。

【結論】医学部生を対象とした生活習慣病予防のための調理実習は有意義であったと回答したものが大多数であった。将来医師として、食生活改善を指導する大切さを知ることができた。